

# 小学6年生が見付けた宮沢賢治作品の魅力に関する事例研究

－「やまなし」を中心に－

A Case Study of Sixth Grade Students' Attraction to Kenji Miyazawa's Works : Focusing on "Yamanashi"

長岡 由記  
Yuki NAGAOKA  
滋賀大学教育学部

田中由紀子  
Yukiko TANAKA  
滋賀県甲賀市教育研究所

<キーワード> 「やまなし」の魅力 宮沢賢治作品の魅力 小学6年生

## 1. 研究の目的

宮沢賢治の「やまなし」は、昭和46年から光村図書の小学校国語科教科書に採録され、現在に至るまで多くの授業が行われている。教材研究の立場から読む「やまなし」について、荻原桂子(2012)は次のように指摘している。

教材研究という立場から読むと、「やまなし」は「わからない」という感想が多い作品となる。小学校六年の文学教材としてとりあげると、「クラムボン」の正体が不明であることが多く問題とされる。授業者は学習者に「クラムボン」の正体を追求することよりも、蟹の視点から川底の世界をみるとどうなるかを考えさせることに重点をおく。学習者が「小さな谷川の底」にいて、自分の目で「二枚の青い幻灯」を見ているような気持ちで読むことをもとめるのである。作品の特色を、「独特のことばや表現」という点と「五月」と「十二月」の世界の違いという点に絞って「やまなし」という題名について考えるという読み方が教材研究の方法である。(p.243)

この指摘にもあるように「やまなし」を読んだ児童の率直な感想は「わからない」であり、小学校の教室では、この「わからない」を少しずつ紐解いていくように「クラムボン」の正体について考えてみたり、蟹の視点から川底の世界を見つめたり、「五月」と「十二月」を対比させながら読んだりするなど、様々な学習が行われている。これまで「やまなし」の授業は、小和田仁(1992)が類型化して示した「①主題追求型、②分析批評型、③イメージ尊重型」(p.387)の方向から主に行われているが、近年ではそれらに加えて藤井知弘(2010)が「今後の授業づくりの方向性」の一つとして示した「多読の方向性：読書活動重視の単元」(p.119)の授業も行われている。これは「賢治作品について、自由読書や指定作品読書などを、中核となる「やまなし」と共に並行読書として読み重ねていく」(p.120)学習である。

「やまなし」の学習とあわせて複数の賢治作品を読む学習は広く行われており、さらに賢治作品の魅力につい

て、文学研究や教材研究の視点からは多く語られてきた。では、「やまなし」をはじめ宮沢賢治作品を読んで、小学6年生の児童はどこに魅力を感じるのだろうか。

本論考では、この点について明らかにするために、「やまなし」とその他の宮沢賢治作品を読み、その魅力をまとめたブックリストを作成するという言語活動を取り入れた授業実践を取り上げ、学習者にとっての「やまなし」の魅力について、具体的な事例を挙げながら検討していきたい。

## 2. 研究内容・方法

本研究で取り上げるのは、滋賀県甲賀市教育研究所の調査研究(共同研究プロジェクト名：書くことで自分の学びを豊かにすることができる子どもの育成)の一環として実施された国語科授業である。調査研究では、自分の学びを書くことを通して自覚する授業を計画・実施し、授業デザインの要点を導出することを主な目的としているが、本論考では、実施された国語科授業について「児童が見付けた「やまなし」の魅力」に焦点化して検討を行うこととする。

分析対象とするのは、2019年10月15日～11月1日に、第6学年児童29名を対象として滋賀県の公立小学校で行われた授業である。使用した教科書は、『国語六 創造』(光村図書、平成27年度版)である。

「やまなし」の魅力については、第7時の学習で作成された「「やまなし」のブックリスト」(27名分※2名欠席)を対象として検討を行う。魅力は一人2点記入しているため、考察対象とする児童が見付けた魅力は54点である。また、10月31日に実施された研究授業の記録(抽出グループの話し合いの記録と各グループが魅力をまとめたボード)についても取り上げ、「やまなし」の学びがどのように他の賢治作品の魅力の発見に繋がっていくのかについても検討を行う。

## 3. 授業の概要

単元名は、「作品の魅力を伝えよう～おすすめ！宮沢

賢治ブックリスト～「やまなし」「イーハトーヴの夢」(光村図書 6 年)である。『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)』[第 5 学年及び第 6 学年] 2〔思考力, 判断力, 表現力等〕「C 読むこと」(1)「エ 人物像や物語などの全体像を具体的に想像したり, 表現の効果を考えたりすること。」「カ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し, 自分の考えを広げること。」の 2 つの指導事項を念頭におき, 単元の目標として以下の 2 点が設定されている。

- ①物語の全体像や作者の思いを想像したり, 表現の効果を考えたりして, 宮沢賢治作品の魅力について自分の考えをまとめることができる。
- ②今までとは違う本の読み方に興味をもち, 自分の読書生活に生かすことができる。

単元の指導計画の概略は, 以下の通りである。

単元の指導計画の概略(全 11 時間)

第一次	単元の内容を知り, 学習計画をたてよう
第 1 時	自分の読書の仕方や既習の教材を振り返り, 魅力について話し合って分類する。
第 2 時	「やまなし」を読んで大体的内容をつかみ, 感想をもつ。魅力の種をみつける。
第 3 時	様々なブックリストを見て, 言語活動のイメージをもつ。学習計画を立てる。
第二次	「やまなし」と「イーハトーヴの夢」を読んで, 作品の魅力を探ろう
第 4 時	自分たちで見つけた表現面の魅力について班で視点を決めて本文を読み, 交流する。
第 5 時	「イーハトーヴの夢」を読んで, 宮沢賢治の生い立ちや生き方, 考え方を知り, 考えたことを交流する。
第 6 時	自分たちで見つけた内容面の魅力について班で視点を決めて本文を読み, 交流する。
第 7 時	「やまなし」で宮沢賢治ブックリストの 1 頁を作り, 交流する。
第三次	宮沢賢治作品の魅力を探り, 「宮沢賢治ブックリスト」をつくろう
第 8 時	宮沢賢治作品を読み, 自分のお気に入りの一冊を選ぶ。魅力的な箇所に付箋を付ける。
第 9 時	自分が紹介したい宮沢賢治作品のあらすじを確認し, ブックリストの前半を書く。
第 10 時	自分が選んだ宮沢賢治作品の魅力を見付け, ブックリストの後半を書く。
第 11 時	作成したブックリストを交流し合い, 学級のブックリストを完成させる。

これまでの読書経験や国語科授業の内容を振り返りながら, 宮沢賢治作品の魅力を様々な視点から見付けて文章にまとめたり, 他者に伝えたりする学習である。本単元を通して, 物語の味わいや読書の楽しみを見付けることができるため, 今後の読書生活を豊かにすることにもつながる重要な学習である。

なお, 第三次の「宮沢賢治ブックリスト」とは, 様々な宮沢賢治の作品を読み, 「あらすじ」と「魅力」を作品ごとに記し, 学級で一冊の本にまとめたものである。ブックリストは, 宮沢賢治の関連図書とともに図書室に展示される予定である。

4. 児童が見付けた「やまなし」の魅力の検討

児童は, 第 7 時までには読書経験や既習学習を思い起こしながら以下の「魅力の種」を抽出している。

- 〈「表現面」の魅力の種〉  
擬音語・擬態語, 色の表現, 比喩表現(例え), くり返しの表現, 題名のつけ方
- 〈「内容面」の魅力の種〉  
物語の設定(場所・物・季節), 登場人物(かっこよさ・セリフの良さ・感情移入(共感)できる), 作者の伝えたいこと(大事な作者の考え), 話の展開の仕方, 場面の対比(切りかわり), 話の結末, 作品の主題(テーマ)

これらの「魅力の種」を参考にしながら, 児童は「やまなし」の魅力を見付けてブックリストにまとめている。このブックリストに記された魅力について「表現面」と「内容面」に分けて見ていきたい。

4.1 「表現面」に関する魅力

「やまなし」をはじめ宮沢賢治作品に共通する魅力として, 以下に引用する西田良子(2006)の指摘にもあるように, 表現の巧みさを挙げることができる。

彼の使用語彙は実に豊かで, 文学的語彙だけでなく, 仏教用語や化学用語, 天文学用語や地質学用語など, 広い領域の語彙を奔放に使い, そのうえ, 独自のオノマトペやメタファーを巧みに駆使して, 口調のよいリズムカルな文体を作りあげている。賢治文学の魅力は, 何よりも他に類をみない〈表現〉にあるといえよう。(p.169)

ブックリストに記された「表現面」の魅力を見ると, 「擬音語・擬態語」「造語」「色の表現」「比喩表現」「繰り返しの表現」の 5 つに大まかに分類することができたため, 以下, それぞれ見ていくこととする。

4.1.1 擬音語・擬態語

「擬音語・擬態語」に関する魅力で最も多かったのは, 「クラムボンのかぶかぶ笑ったよ。」の「かぶかぶ」に魅力を感じるというコメントである(表 1)。

表 1 「やまなし」の魅力ー擬音語・擬態語

1	音の表現のしかたがおもしろくて, たとえば笑う表現はクスクスやケラケラって表すのに, カブカブと書いていたり, 水の音は, だいたいちゃぼんと表すのにサラサラって書いてるので静かに流れてるのかわかって想像することができます。
2	ぼくが魅力に思った擬音語は, 「かぶかぶ」と笑う所です。なぜかという, ふつうのお話では「ハッハッハッ」とか「ガハハハ」とかそういう感じで笑っているのになぜやまなしのクラムボンはかぶかぶ笑っているのかと思ったからです。

3	宮沢賢治はなぜにこにこやゲラゲラなどの表現を使わなかったのでしょうか。理由は分からないけど、水の中の話だから泡を表しているのでしょうか。それともあえてカプカプにしたのか、考えてみるとよりよい作品です。
4	一枚の5行のところ、「かぶかぶ笑ったよ」っとかいてある。ふつうは、「ニヤニヤ」とか、「ニコニコ」とかだけど、これは、かぶかぶで、どくとくな表現だなあ〜と思いました。
5	宮沢賢治は、「クラムボンは、かぶかぶ笑ったよ」と言っています。でもなぜけんじさんは、この表現は、どのようなことを思っただけなのでしょう。ふつうは、にこにこことかの表現の方がいいきもしますけど？
6	この一文は、なぜ笑ったか分からないけどこの笑い方「かぶかぶ」という表現が書いています。そしてかぶかぶの意味をさがしたくなる文です。
7	「かぶかぶ」とか「サラサラ」など、ふだん使わない言葉を使っていて、どういう意味なのか、私達も考えさせられる表現がたくさん使われています。例えば、「ぶるぶる」は「怖い」と変えても意味は同じで、考えられる話です！
8	いろいろな音とか表現があって、その意味を考えてみたらよく分かることが多くてそのカニとか物語の意味がわかりやすいと思いました。ぼくがいいと思うのは、ぶるぶるだと思いました。とても意味がわかりやすかったからです。
9	読んでるとふだん使わない、「かぶかぶ」など、いつ使うかわからない言葉が出てくる話です。いろいろな言葉が出てきて調べたいようなお話なのでオススメです。

1～5の児童は、これまでの経験に基づくと、笑う様子を表現したいなら「クスクス」「ケラケラ」「ハッハッハッ」「ガハハハ」「にこにこ」「ニヤニヤ」などを用いるが、なぜ「かぶかぶ」なのかという点に疑問を持ち、3の児童は「理由は分からないけど、水の中の話だから泡を表しているのでしょうか」と推測している。そして、5の児童は「にこにこことかの表現の方がいいきもしますけど？」と提案し、6の児童は「かぶかぶの意味をさがしたくなる文」と記している。また、7の児童は「かぶかぶ」とか「サラサラ」など、ふだん使わない言葉を使っていて、どういう意味なのか、私達も考えさせられる表現がたくさん使われています」と述べている。擬音語・擬態語の学習では、意味の把握とあわせて実際にその語を用いて例文を作ることがあるが、9の児童は「かぶかぶ」については「いつ使うかわからない」と指摘している。7・8の児童は「ぶるぶる」を例に挙げて、言い換えが可能であることや分かりやすい点に言及している。

賢治作品における擬音語・擬態語については、吉本隆

明(1996)が、「宮沢賢治ほど擬音のつくり方を工夫し、たくさん詩や童話に使った表現者は、ほかにみあたらない。眼にうつる事象のうごきを、さかんに音の変化や流れにうつしかえようとした。はんたいにぴったりした語音があると、すぐにかたちの像に転写できる資質も、なみはずれていたとおもえる」(p.331)と述べているが、学習者も非常に巧みでイメージを喚起する独特な表現に魅了され、その意味を追究したり、作者の思いを想像したりしていることが分かる。

#### 4.1.2 造語

次に、「造語」に関する魅力を見ていく(表2)。

表2 「やまなし」の魅力—造語

10	話に出てくる。「クラムボン」とは、作者が考えた生き物で、どのような形も分からないし、生きたり死んだりしている不思議な生き物です。ほかにもイサドという作者が考えた村や、作者の想像の中のお話のようで、読んでる人も想像がふくらみます。
11	クラムボンというのは、この世にいない生物なのになぜそういう名前をつけたのかということ深く考えると魅力的と思った。
12	クラムボンという生き物がいて、現実ではない生き物が出てきたりしておもしろいからです。あとクラムボンの生活のこともかいていておもしろいからです。
13	クラムボンという文章がたくさん出てきます。「クラムボン」について注目して読むとおもしろいので、ぜひ注目して読んでください。ぼくはクラムボンは光だと思います。
14	お話の中にクラムボンというなぞの生き物が出てきます。でも、話の中にクラムボンについてくわしく書かれているわけではないので、クラムボンはどんな生き物なのか想像するのが楽しいです。
15	このお話は人間ではなく、カニの視点で始まります。視点がカニで面白い！だけでなく、お話に出てくる「クラムボン」というなぞのものもでてきます。「クラムボン」の正体はわからないので、自由に想像できて、読みやすいです！
16	いったいクラムボンの正体は何だったのだろうか。ぼくは、カニの吐くあわと思います。なぜかというところ、このやまなしには、カニがでてきて、あわの大きさしようぶをするからです。でも宮沢けんじは、何と書いて書いたのでしょうか。
17	このお話に出てくるクラムボンという何かかわからない生き物がでてきます。このクラムボンは、「死んだよ」のあとの文で「笑ったよ」と書かれていて少し意味の分からないところがおもしろいです。
18	この物語では宮沢賢治の作った単語が出てきます。なぜその言葉にしたのかを考えるのも読んでいく上での魅力なのだと思います。

19	表現は、つぶつぶ、ぼつぼつや筆者が考えたクラムボンなどが書かれています。このようなことを読んでいくと、川の中が想像できてどんなかんじかもわかってくるので読んでいくと楽しいです。
----	--

10～19の記述をみると、ほとんどの児童が「クラムボン」に興味を抱いていることが分かる。荻原(2012)は、「やまなし」には賢治の造語とみられる国語辞典には載っていない意味不明のことばや地方独特の風物であって児童が直接接触したことがないものが登場する。意味不明なことばの代表が「一 五月」に登場する「クラムボン」である。「クラムボン」に関しては百家争鳴のさまで、「やまなし」の作品を読む話題にはなっているが、意味不明のことばとして作品世界の象徴ともなっている(p.242)と指摘している。この「クラムボン」について、10の児童は「作者が考えた生き物」、11・12の児童は「この世にいない生物」「現実ではない生き物」として捉え、13の児童は「光」、16の児童は「カニの吐くあわ」ではないかと推測している。そして、多くの児童は正体が分からないからこそ自由に想像できるという魅力があると指摘している。19をみると、前述した擬音語・擬態語と造語によって「川の中が想像できてどんなかんじかもわかってくる」と述べており、川底の世界をしだいに自分の目を通してみるようになっていく様子が見てとれる。

4.1.3 色の表現

「やまなし」は宮沢賢治の「心象」<sup>1)</sup>文学作品であり、「青」をはじめ象徴的な色彩表現が多く用いられている。この「色の表現」を魅力の種として記しているのは、表3に示した20～25の6名である。

表3 「やまなし」の魅力一色の表現

20	やまなしはこの一文（*二ひきのかにの子どもらが、青白い水の底で話していました。）のように水に関する色の表現が多いです。ほかにも黒や白といった表現もあり、見つけてみてください。
21	この物語は、いろいろな表現があります。それは、すべて色と組み合わせられている物が多いのです。例えば、「コンパスのように黒くがっている。」などです。このようにすることで、想像することができ、自分の想像をふくらませることができるのも魅力です。
22	いろいろな色があるけど水という表現じゃなく青白いをつけたりして、不気味な感じを出して、他にも金と書かずに黄金とおうごんと書いてきんと読むので、すごく明るい感じがします。その場面ではすごく明るい場面だと思いました。
23	「青白い水の底」や「日光の黄金」など！色の表現の仕方がキレイで、感情移入して読みやすい！作者独特の世界観がこのお話には入っているので、色の表現の仕方を色々見つけてみよう！

24	五月は春で、ぼくてきには明るい感じだけど賢治さんは、暗いと表現をしていて、少し意外性を感じるころです。
25	十二月は、雪などがあり、なにしろ冬なのに火という表現を使っているということは、冬は明るく、春は暗くして見せている。

21の児童は、多くの表現が「色と組み合わせられている」ことに気付き、想像を膨らませられるという魅力を見つけている。その組み合わせと関連して、22の児童は「青白い水の底」や「日光の黄金」に着目して「不気味な感じ」や「すごく明るい感じ」など色彩表現が加わることによるイメージに言及している。「黄金」については、「にわかにはぼっと明るくなり」という叙述だけでなく色彩表現からも明るさが一変する様を感じとっていることが分かる。20の児童は、特に水に関する色の表現が多いことに気付き、23の児童と同様に、色の表現の仕方を見つけるように提案している。24と25の児童は、「五月」と「十二月」について、現実世界で自分たちが感じるイメージとのずれに着目し、作者の意図を読み取ろうとしている。

4.1.4 比喩表現（例え）

色の表現とも関わりが深いのが、表4に示した比喩表現である。

表4 「やまなし」の魅力ー比喩表現

26	このお話では、ふつうみんながしないような表現を使い、みんなを考えさせます。でもその分表現について考えられ、とてもワクワクします。特に波のことを青白い炎と例えていたり、水面を天井に例えているのは、みんなは思いつかないような、賢治独特の表現で面白いです。
27	カニが水の中からみてなみがゆれているのを青白いほのおとらえているのが魅力的と思った。
28	天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしている所です。なぜなら、天井ではの所は水面の例えだし、波が青白い火を燃やしたり消したりしているの所は、波が大きくなったり、小さくなったりなることを例えとしていると思いました。
29	水面の波が青いほのおの様にに見える事を天井の青いほのおとたとえている。少しきれいにも感じる。
30	宮沢賢治さんの表現の仕方が面白いです。クラムボンという生き物を作ったり、波が立っていない事をなめらかな天井という風に表したりしてすごく面白いです。やまなしは表現に注目して見ると面白いと思います。

31	この一文（*お父さんのかには、遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのぼして、よくよく見てから言いました。）はお父さんのカニが目をこらして見ている様子です。やまなしには、このような表現がたくさんあり、そこも見ていると楽しいです。
----	---

26・27の児童は「十二月」の「波は、いよいよ青白いほのおをゆらゆらと上げました」の箇所に着目し、26の児童は、波を「青白いほのお」に例えていることについて、「ふつうみんながしないような表現を使い、みんなを考えさせ」る表現であると指摘している。また、27の児童は、「カニが水の中からみてなみがゆれているのを」と、カニの視点であることに触れている。28の児童は「天井では、波が青白い火を燃やしたり消したりしているよう。」について、「波が大きくなったり、小さくなったりなること」の例えだと解釈している。29の児童は「まもなく、水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青いほのおを挙げ」の箇所に着目して、「波」が「青いほのお」のように見えることを「少しきれいにも感じる」と述べている。30の児童は、「五月」の「そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗いあわが流れていきます。」を取り上げ、「波がたっていない事」を「なめらかな天井」に例えていることに面白さを感じている。31の児童は、「遠眼鏡のような両方の目をあらんかぎりのぼして」は「お父さんのカニが目をこらしてみている様子」だと解釈し、比喩表現を探す楽しさを伝えている。

#### 4.1.5 繰り返しの表現

繰り返し表現の魅力は、表5に示す3点である。

表5 「やまなし」の魅力—繰り返しの表現

32	（カブカブだとカブ、カブ。サラサラだとサラ、サラ。同じ言葉をくり返す。）なぜそのくり返しの言葉が多いのかは読んだ人の考え方によってちがうと思います。そのようにこのお話はたくさんくり返しの言葉が出てきます。ぜひみなさんも自分だけの考えを見つけてみて下さい。
33	カブカブ笑ったのときは、へらへらわらったとも言えるし、「いい、いい」も「いい」だけでもいけるやろと思う。「待て待て」も「待て」だけでいいだろとも思う。だからやまなしは、同じ文をなんかいもくり返すのが魅力的と思った。
34	このシーンは“クラムボンが笑ったよ”や“クラムボンははねて笑ったよ”“クラムボンは笑ったよ”などのくり返し？？みたいなかんじでとっても楽しそううれしいのが読んで伝わってきます。

32と33は、語レベル、34は文レベルの繰り返しの表現について言及したものである。32の「かぶかぶ」や「サラサラ」は擬音語・擬態語にも分類できるが、「くり返しの言葉」の魅力を伝えようとしているためここで取り上げた。33の児童が「いい」だけでもいけるやろと思う」と記しているが、望月善次（1987）の論考に採録

された授業記録にも「いい」「ねろ」「待て」は一回でも意味は通じるのになぜ二回言うのかについて話し合う様子が記されている<sup>2)</sup>。小学校6年生にとってこの繰り返しの表現は疑問に思うと同時に魅力を感じるものであることが分かる。

34の児童は、指摘するカニの兄弟の会話の部分について、「とっても楽しそううれしいのが読んで伝わってきます」と記している。原子朗・伊藤真一郎・角野栄子・渡部芳紀（1986）の共同討議において渡部氏も「あそこの会話の中にある、たとえばリフレイン。その響きの楽しさ、しかも兄と弟のかけ合いで、似たような言葉が重なり合って、しかもちよつとずちよつとずちよつとずちよつと繰り返されていく、そこの楽しさ」（p.44）と発言しているが、同じような感覚を児童も抱いていることがわかる。

#### 4.2 「内容面」に関する魅力

次に「内容面」に関する魅力を取り上げる。「内容面」は「物語の設定」「登場人物」「展開」に大まかに分類することができたので、それぞれ見ていきたい。

##### 4.2.1 物語の設定

「物語の設定」の魅力は、以下の表6の通りである。

表6 「やまなし」の魅力—物語の設定

35	場所は、川から始まります。川にカニの親子がいました。季節は春です。そこで、カニがなぞの言葉を言います。クラムボンという言葉を使いました。魚なども出たりします。
36	最初らへんの所で川とかいっているけど海のイメージでお話をかいていておもしろくて変わったかんじだった。魚がいっぱいでできたりして川では魚がいるけど私なりに海のイメージに思えたのでおもしろかった。

35の児童は、物語の設定について端的にまとめて記している。一方、36の児童は「川」という設定ではあるが、「私なりに海のイメージに思えた」と記し、そこに面白さを抱いている。

##### 4.2.2 登場人物

「登場人物」の魅力は、以下の表7の通りである。

表7 「やまなし」の魅力—登場人物

37	カニの家族は、弟・兄・父が出ました。だけども「母」だけ出ていません。そういうなぞに包まれた登場人物にも魅力を感じました。
38	登場人物は、ふつうは、人でたまに、動物だけども「やまなし」では、かにです。人は、2～3人出るだけです。あと、クラムボンは、何人だろう？でも人じゃない所がすごい！！

39	やまなしの登場人物はカニの親子とクラムボンで人は出てきません。クラムボンが人かどうかは分かりませんが…やまなしはカニが人間に例えられているだけなので、本当に人は出てこないし、カニ同士の会話も人間ではしないような話で面白いです。
40	普通のカニは、しゃべらないけどこのカニは色々なことをしゃべっています。このやまなしは、カニがしゃべっているのがカニがどう感じているのかがわかったりするので面白いですよ。
41	自分のあわのほうがおおきいといいはったりしているところが、とても負けずぎらいと思った。
42	カニの子どもたちのお父さんが出てきた。「どうしたい。ぶるぶるふるえているじゃないか。」とお父さんが言いました。するとカニの子どもたちがこう言います。「今、おかしなものが来たよ。」「青くて、光るんだよ。はじが、こんなに黒くとがってたよ。」「そいつは鳥だよ。かわせみと言うよ。」

37の児童は、「母」の不在について謎めいた部分を感じとり、そこに魅力を感じている。38・39の児童は、登場人物に人が出てこないことについて言及している。39・40の児童は、かにの兄弟の会話は人間の言葉で表されているが、人間ではなくかにの目線から語られていることに着目し、かにがどう感じているのかが分かることの面白さについて記している。41の児童は、吐く泡の大きさについて競い合っている会話に着目し、そこに表出しているかにの兄弟の性格を想像している。42の児童は、かにの兄弟がみた「おかしなもの」について知っている「お父さん」の登場に着目し、「かわせみ」であることを教えるまでの流れについて叙述を引用しながらまとめている。

4.2.3 展開

「展開」に関する魅力は、以下の表8の通りである。

表8 「やまなし」の魅力ー展開

43	五月から十二月に変わるのには、意味があるのかなと思いますが、私は五月のイメージを十二月で良くしているのだと思いました。このような作者独特の展開の理由を考えて読むと、とても面白いです！
44	この物語では、五月から十二月まで続く物語。そしてそこから物語がどんどんいろんな展開になっていくのがとてもおもしろく、魅力の一つだと思います。
45	「クラムボン」なぞの生き物で話題になり、お話ではいきなり「クラムボンは殺されたよ」が出て、いきなり死んだのがビックリして、そういう所に魅力を感じました。

46	話にでてくる。「カニ」の兄弟がしゃべっている話の内容のアップダウンの激しさがいいと思います。例えば「クラムボンは笑ったよ」から「クラムボンは死んだよ」と、アップダウンの激しさも、一つの魅力だと思います。
47	最初の文では、「クラムボンは笑ったよ。クラムボンはカブカブ笑ったよ。クラムボンは笑った」の所の文では笑っているけれど、次の文には、急に「クラムボンは死んだよ」と言っているのが、すごく場面の切りかわりが魅力的です。
48	“クラムボンは殺されたよ…”このざんこくな一言から始まります。さっきまであんなに楽しそうなふんいきだったのにいきなりくらくらしていきます。なにがあってクラムボンは死んだのかと自分で想像するところがとてもおもしろいです。
49	この一文は、なぜ殺されたか分からないけど、なぜ殺されたかを考えられる文となっています。なぜ殺されたかは、「笑ったよ」「かぶかぶ笑った」が関係しているかもしれません。
50	さいしょは、「クラムボンが笑ったよ。」「クラムボンがかぶかぶ笑ったよ」と弟のカニが言います。その時一匹の魚がクラムボンをとおり過ぎました。また、カニの弟がこう言います。「クラムボンは死んだよ」「クラムボンは殺されたよ」
51	「クラムボンは死んだよ」、「クラムボンは殺されたよ」の所が、なぞの所です。その後、また「クラムボンは笑ったよ」と言っているのが、クラムボンは死んだのか生きていたのかが、分からない、とても印象が残る話です！結果、どっちだったのかが、はらはらしたりする話です！！

43・44の児童は、「五月」から「十二月」への展開に少しずつ変わっていくイメージの変化を汲み取り、そこに面白さを感じている。このイメージの変化は、先述した24・25の児童の指摘にある色の表現の魅力とも関連している。45～51の児童は、「クラムボンは笑ったよ。」から「クラムボンは死んだよ。」へと急に切りかわる箇所に着目している。この場面展開について、西田(2006)は「場面は〈明〉から〈暗〉に一転する。クラムボンが魚に食べられ、魚はカワセミに捕らえられ、いわゆる自然界の「弱肉強食」のドラマが展開していく」(p.170)と記しているが、まさにその場面に児童は想像を掻き立てられ、魅力を感じていることがわかる。

4.3 まとめ

児童は「やまなし」を読んで、「擬音語・擬態語」「造語」「色の表現」「比喩表現」「繰り返しの表現」「物語の設定」「登場人物」「展開」に着目し、それぞれの魅力について語っていた。それに加えて、総括的な魅力を記しているものもみられた(表9)。

表9 「やまなし」の魅力—総括編

52	読んでいる内になぞだらけになるお話です。ですが、その話のことを自分で考えるのもおもしろいです。！！
53	少しこわそうな黒だがそのしょうたいは……この紙のどこかにもっているかも……知りたい人は本を読むべし。
54	この作品では、宮沢さんの独特な表現も魅力の一つです。そして読むだけではなく物語の内容を奥深くまで読みすすめることで、さらに魅力がいっぱいあると思います。

「やまなし」を読むうちに「なぞだらけ」になるが、そこに面白さを感じている52の児童や、読めばわかる箇所に着目してなぞかけをしている53の児童のコメントなどをみると、楽しみながら「やまなし」を読んでいること、またそれを他者に積極的に伝えようとしていることがみてとれる。そして、54の児童の言葉に表されているように、子どもたちは54点もの魅力を見つけただけでなく、「奥深くまで読みすすめること」によって、さらに魅力を見付けることができることにも気づいているのである。

## 5. 児童が見つけた宮沢賢治作品の魅力の検討

それでは、これまで見てきた「やまなし」の学びは、どのように他の賢治作品の魅力の発見につながっていくのだろうか。

第三次では他の宮沢賢治作品を取り上げ、その魅力についてグループで検討する授業が行われた。授業で取り上げられた作品は、「ツェねずみ」「雪渡り」「セロ弾きのゴーシュ」「銀河鉄道の夜」「よだかの星」「注文の多い料理店」の6作品である。

第10時に8つのチームに分かれてそれぞれ話し合い、各作品の魅力についてホワイトボードに書いてまとめている。表10に示した各チームのまとめを見ると、「登場人物」「物語の設定」「展開（場面の対比）（話の結末）」「繰り返しの表現」「会話」など、「やまなし」の学習で用いた「魅力の種」を活用して魅力を見付けていることが分かる。

「セロ弾きのゴーシュ」チームは、「話の結末」を魅力の種として話し合いを行っており、「ゴーシュの言葉で終わっている」ことについて、主人公の台詞で終わるのはめずらしいという趣旨の発言をしていた。また、多くの作品はハッピーエンドかバッドエンドのどちらかに分類できるのに、「ハッピーエンドかバッドエンド」なのか分からないと話していた。このように、既習学習や読書経験と照らし合わせて、作品の独自性に着目するグループが多かったのも、賢治作品の魅力を見付ける学習の一つの特徴である。同様に、「雪渡りA」チームの話し合いにおいても、「多分かんこが言いましたとか普通の本やったらそう書いてあるやん。けど、はじめで名前をもってきて歌で会話してるから、だから、そういう風

に書いていないのが他の本と違うところ」という発言がみられた。

さらに、「雪渡りA」チームは「歌の会話」に着目し、その魅力について次のように語っている。

### 【「雪渡りA」チーム】

C1：あれはあの、話しながら楽しめる。

C2：どういうこと？

C1：話しながら音楽で。

C3：あ、リズムに乗れる？

本を読んでいるうちにリズムに乗れるみたいな。歌の会話がリズムに乗っている。

C1：あの、なんていうの、あの話しながら楽しめる。

C2：どういうこと？話しながら楽しめるって。

C3：読みながら頭で、自分でリズムとか作って楽しめるみたいな。

C1：そうそうそう……。

C2：読み込んでいくうちにリズムがとれていく。

C3：まあ、そんな感じやな。

歌やからこそ分かりやすいみたいな。

ホワイトボードには「読み込んでいくうちに、内容がよくわかる」と記していたが、そこに至るまでに、子どもたちは作品に流れている音楽を感じとり、その感覚を表す言葉を探っていた。西田（2006）は「彼のユニークな表現は、作品のストーリーやメッセージより先に、読者のこころを捉えてしまう。賢治独特の表現は、初めは不協和音のように感じるが、やがて不思議な音韻を感じるようになり、次第に魅力的な和音に変わって行く」（p.169）と表現しているが、宮沢賢治作品の魅力の一つである音楽性を感覚的に捉え、そこに魅了されながら言葉を紡いでいる子どもの姿を見ることができたのである。

## 6. 結語

以上、「やまなし」をはじめ宮沢賢治作品を読んで、小学6年生の児童はどこに魅力を感じるのかについて、事例を挙げながらみてきた。「やまなし」について中野新治（1993）は、「童話というよりもむしろ物語詩というジャンルを設定したいとさえ思えるこの作品は、単なる散文の域を超えており、理性的な分析だけの理解を拒むものがある」（p.83）と指摘しているが、本論考で取り上げた授業は、まさに子どもたちの感性でとらえた魅力が自分なりの言葉で表現されていた。

授業後の研究協議会では、「宮沢賢治の生い立ちと絡めながら魅力を見付けること」についての指摘もあった。確かにその方向からの先行授業も行われているが、作品そのものを読んで子どもたちが感じた魅力を、これほど丁寧に表出できる授業が展開され、全員が自分の言葉で書き表せていたことが本授業の何よりの成果である。

表 10 宮沢賢治作品の魅力 (チームのまとめ)

ツェねずみ A	ツェねずみ B	雪渡り A	雪わたり B
登場人物…・ツェねずみはずるがしこい。 話の設定…色々な道具がしゃべっている。 ・ツェねずみは最後悪いことをしたから自分に返ってくる。 登場人物②… ・ねずみ取りは下男の仲間なのか？ ・いたちはねずみと仲が良かったが、ねずみがいすぎていたちはこんぺい糖を投げつけた。 ・ツェねずみは上からめせんで道具を泣かせている。	・落ちたねずみをはしらは助けていて優しい。 ・逆恨みされたのにいたちはこんぺいとうをねずみにあげた。 ・人の感情が無いものが登場人物として出てきてしんせいで面白い。 ・しつこく「まどうてください」と言っているのにバケツは何回もあやまるバケツは優しい。	・動物にしか分からない歌の会話をしている。 ・歌の決まりがある？(相手の名前をくり返している。) ・読みこんでいくうちに、内容がよくわかる。 ・どうして、兄弟はキツネを呼んだのか？ ・歌の最初に自分たちの名前をこおった雪にたとえている。 ・なぜ十一さい以下しかきてはいけないのか？	(登場人物) ・四郎はやさしい ・キツネは強がり ・かん子ははずかしがりや (表現) ・食べ物で表している ・昔の字でかかっている ・ふつうとはちがう年れいで表している ・くり返しの言葉がある
セロ弾きのゴーシュ	銀河鉄道の夜	よだかの星	注文の多い料理店
・ゴーシュの言葉で終わっている ・ハッピーエンドかバッドエンドなのか分からない →ごんぎつね (バッドエンド) カレーライス (ハッピーエンド) ⇒どちらでもない(?)	・場面ごとに景色が変わる ・直感的に言ってない ・場面ごとに登場人物が出てくる	・一つの登場人物に多数の登場人物が関係している ・ふつうしゃべらないものがしゃべっている ・よだかと他の登場人物と比べている	・しょうげきのだった ・だまされてかわいそうだった ・顔がもどらなくてかわいそうだった ・いがいだった ・料理店がなくなっていた

【注】

- 1) 板谷 (1990) は「心象」について次のように記している。: 賢治は幻夢の中で自分が見たり感じたりした幻想的なものや、それを文学的に昇華させたもののことを“心象”と呼びましたが、その心象こそこの不世出の大詩人の創作の靈感の正体だったので。ですから心象の様子がいくらかでもわかるようになると、イーハトーヴの世界つまり賢治の心象の世界はぐっと身近になります。(p.12)
- 2) 児童は繰り返しの表現効果について、「二つ重ねることによって意味が強調されている」(p.105)、「本当に言いたいって言うか、一回だと、一回よりも、言いたいって言う感じ」(p.106) と発言している。

【文献】

- ・板谷栄城 (1990) 『宮沢賢治の見た心象～田園の風と光の中から』日本放送出版協会
- ・荻原桂子 (2012) 「文学教材の研究—宮沢賢治「やまなし」(小学校六年)の言語表現—」『九州女子大学紀要』49 (2), 235-248
- ・小和田仁 (1992) 「やまなし」『国語教材研究大辞典』(国語教育研究所編), 明治図書, 384-388
- ・中西市次 (1982) 『賢治童話『やまなし』を読む—川底の心象風—』高校生文化研究会

- ・中野新治 (1993) 『宮沢賢治・童話の読解』翰林書房
- ・西田良子 (2006) 「「やまなし」における〈表現〉と〈寓意〉」『国文学 解釈と鑑賞』71 (9), 168-172
- ・原子朗・伊藤真一郎・角野栄子・渡部芳紀 (1986) 「〈共同討議〉賢治童話を読む」『国文学 解釈と教材の研究』31 (6), 30-75
- ・藤井知弘 (2010) 「第六章 宮沢賢治「やまなし」の授業実践史」『文学の授業づくりハンドブック第3巻—授業実践史をふまえて—』溪水社, 105-121
- ・望月善次 (1987) 「資料=授業記録『やまなし』(宮沢賢治)」『教育工学研究』9, 97-109
- ・吉本隆明 (1996) 『宮沢賢治』筑摩書房

【謝辞】

貴重な授業を公開して下さった研究推進委員の先生、児童の皆様様に心より感謝申し上げます。

【付記】

本研究は滋賀大学教育学部の令和元年度地域教育支援をねらいとした共同研究事業費の助成を受けている。